愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第40巻　第1号　153～160　1993

住環境教育の研究

―― 生活科教科書における住環境関連項目の検討 ――

曲　田　清　維
（住居学研究室）

（平成5年4月26日受理）

1．は　じ　め　に

環境教育指導資料[1]（小学校編）によると，環境教育は学校教育，家庭教育及び社会教育を通じ行われねばならないとし，小学校における環境教育については，①豊かな感受性を育成すること②活動や体験を重視すること③身近な問題を重視すること，を踏まえて取り組む必要があるとしている。これらの指摘は，小学校段階での環境教育を考えていく上で，子どもたちが身近な環境問題に積極的に関わり，かつその中味を総合的に捕らえ，解決の方向を見いだそうとする学習として獲得していくならば，大層意味あることである。

しかしながら，学校教育における環境教育の位置づけとその体系については，必ずしも明確にされているわけでもなく，また幾つかの実践も途上にある。だからというわけでもないが，環境教育指導資料でも前提となる様々な議論は踏まえつつも，独自の領域を示しているわけでもないし，或いはまた各教科を結んでの体系的な中味を構築しているわけでもない。

そんな中にあって，小学校低学年に設けられている生活科については，環境教育に対する役割期待が大きく，環境教育指導資料でも学習指導要領における生活科の目標と教育課程審議会答申（昭和62年12月24日）における生活科新設の趣旨を引用して，「生活科は環境教育の目的ときわめて関連が深く，低学年の児童の環境教育の重要な部分を担っていくことが求められる。」とすると同時に，「生活科では児童自らが環境の構成者であり，また，そこにおける生活者であるという立場からそれらに関心をもち，具体的な活動や体験を通して，環境と一体的にかかわり，自分と社会や自然とのかかわりについて自ら納得して分かることを大切にしている」とその役割を重視している。

小学校低学年において，生活科に対する環境教育からの期待は，文部省をしてもこのように大きいわけだが，環境教育にかかわる教育・研究者からもそれは大きい。なぜなら，低学年においては，先年まで設けられていた理科と社会科が小学校1・2年では廃止され，その結果，環境にかかわる教科としては生活科が事実上もっとも大きな位置を占めるようになったわけでもある。

こうした観点から，生活科の教科書を眺めてみると，これまでの低学年理科や社会とは少々趣を変え，積極的に地域環境や自然環境を活用しようとする姿勢がみられること，そのため子どもの活動・遊びを主体においた項目が増えていること，加えてそれらに関連し，「生活規範や技能」の獲得を目指した内容が盛り込まれていることなどが特徴となっている。こうした変

化については，より以前には生活科新設に際しても様々な角度から議論がなされたが，生活科の学習が現実のものとなっている現下では，引き続き批判的検討が必要であるとともに，より効果的な学習内容の構築も急務となっている。

さて，筆者はこれまで「住環境」に関する教育のあり方はどのようなものであるべきかを追求するため，既存の教科書－社会科，家庭科，理科等－について分析してきた[2]が，こうした生活科における「環境」や「生活」の取り上げ方を見た場合，その検討も必要かつ急務であると思われる。従って，本研究では，生活科の教科書をもとに，広い「環境」のうち，「住環境」に焦点を当てつつその検討を行い，低学年における住環境教育のあり方に資するものである。

表1　生活科教科書一覧表（平成4年度用）

発行社名	教　科　書　名
東京書籍（T社）	あたらしいせいかつ　1年 あたらしいせいかつ　2年
学校図書（GT社）	小学校　生活　1年 小学校　生活　2年
大阪書籍（O社）	わたしたちのせいかつ　1年 わたしたちのせいかつ　2年
中教出版（CH社）	しょうがくせいの　せいかつか　1年 しょうがくせいの　せいかつか　2年
教育出版（KY社）	せいかつか　なかよし　1年 せいかつか　なかよし　2年
大日本図書（D社）	たのしいせいかつ　1年 たのしいせいかつ　2年
学習研究社（GK社）	みんなのせいかつ　1年 みんなのせいかつ　2年
啓林館（K社）	せいかつ　1年 せいかつ　2年
光村図書（M社）	せいかつ　1年 せいかつ　2年
現代美術社（GB社）	どうしてそうなの　こどものせいかつ　1 ほんとはどうなの　こどものせいかつ　2

2．研究の方法

生活科の教科書は，1991年の文部省検定を終え，翌年4月に初めて子ども達の前に登場した。11社の検定済み教科書のうち，購入可能な10社のもの10組20編について分析を試みた（表1）。分析の柱は，学習指導要領及び教科書の中味を検討した結果，まずその内容を大きく学校生活，地域生活，自然環境，家庭生活の4つに分け，教科書におけるそれぞれの量的分類を押さえ，次いで一部地域生活と住環境にかかわる3つの項目を中心に考察を行った。

3．学習指導要領の検討－環境教育との関連を中心として

学習指導要領の改訂に先立って，昭和62年2月，教育課程審議会は，生活科に関し，「生活科は，具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ，自立への基礎を養うことをねらいとして構想するのが適当である。なお，これに伴い，低学年の社会科及び理科は廃止する。」との見解を示した。このことにより，生活科は，従来の理科や社会科とは別のものとして積極的に位置づけられ，平成元年の指導要領の下に登場した。

第1学年及び第2学年の目標として

「(1)自分と学校，家庭，近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心をもち，集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え，適切に行動することができるようにす

る。

(2)自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち，自然を大切にしたり，自分たちの遊びや生活を工夫したりできるようにする。

(3)身近な社会や自然を観察したり，動植物を育てたり，遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい，それを言葉，絵，動作，劇化などにより表現できるようにする。」

を掲げるとともに，その指導計画の作成に当たって「(1)地域の社会や自然を生かすとともにそれらを一体的に扱うように学習活動を工夫する。(2)自分と地域の社会や自然とのかかわりが具体的に把握できるような学習活動をおこなうこと。(3)生活上必要な習慣や技能の指導については，社会，自然及び自分自身にかかわる学習活動の展開に即して行うようにすること。」が盛り込まれ，生活科においては環境が「素材」であると同時に「対象」であることを打ち出したものともなっている。

このことは，先述したように環境教育指導資料ではさらに大々的に取り上げられたわけだが，その上で，生活科の学習内容と環境教育のかかわりについて，以下の4点を上げている[3]。

「ア　身近な環境に触れ合い，ありのままにとらえる　（関心）
イ　自分の夢や願いをかなえるために環境に働き掛ける　（意欲・態度）
ハ　環境と自分とのかかわりについて考え，表現する　（思考・表現）
ニ　活動を通して環境についての認識を深める　（気付き）」

これらの位置づけに呼応してみてみると，環境とりわけ住環境に係わるものとして，小学校1年では，通学路，公園，2年では，町探検に関する教材が上げられると思われる。

4．4つの項目の量的比較－子どもを取り巻く生活と空間に関連して

各社の教科書の中味は，その重点とする所はそれぞれ少しずつ異なるものの，大まかに学校生活に関わるもの，地域における社会生活に関わるもの，自然に関わるもの，子ども自身の成長や家族に関わるもの，に分けられる。これらは，子ども（或いは人々）を取り巻く4つの項目と言える。

そこで対象教科書20編について，この4つの項目－学校生活，地域生活（と環境），自然環境（と生活），家庭生活（と環境）－に分け，さらに1年生のものについては13の小項目，2年生のものについては10の小項目（表参照）に分類し，それぞれ該当する頁数の比率を求め，各々の教科書の特徴を検討した。

(1)　1年生の教科書について

まず，1年生の教科書を分析してみよう。教科書を目次などを除いた実質の頁数で見ると，1年生の教科書は多いもので113頁，少ないもので79頁とばらつきがあり，平均すると96.7頁である。そのうち，もっとも大きな位置を占めるのは自然環境であり，トータルの平均では半分を越える。次いで，学校生活で約4分の1，地域生活，家庭生活は各1割強となる。新入生として学校生活に慣れるための様々な工夫が大きく盛り込まれることになる。小項目では，「自然・季節と遊び」22.4％，「植物の成長」10.7％であり，自然環境の項目が多く，次いで「学校・校庭探検」8.7％，「学校の行事」8.1％，「家族・人間」7.3％と続く。地域生活に関する

表2　1年生用教科書の構成

	学校生活			地域生活		自然環境					家庭生活			計
	入学友達	学校行事	学校校庭探検	通学路色々な道	公園遊び	植物	動物	自然季節遊び	季節と生活	おもちゃ作り	家族人間	自分の仕事	成長	
T	8 7.4	10 9.3	8 7.4	5 4.6	7 6.5	14 13.0	9 8.3	17 15.7	8 7.4	12 11.1	5 4.6	5 4.6	—	108 100.0
GT	4 4.8	7 8.4	10 12.0	4 4.8	4 4.8	12 14.5	6 7.2	22 26.5	4 4.8	—	4 4.8	4 4.8	2 2.4	83 100.0
O	2 2.1	11 11.3	6 6.2	4 4.1	8 8.2	10 10.3	4 4.1	36 37.1	8 8.2	—	6 6.2	2 2.1	—	97 100.0
CH	6 5.6	6 5.6	8 7.5	4 3.7	6 5.6	12 11.2	6 5.6	21 19.6	20 18.7	6 5.6	6 5.6	2 1.9	4 3.7	107 100.0
KY	6 6.4	6 6.4	9 9.6	5 5.3	6 6.4	12 12.8	6 6.4	22 23.4	4 4.3	4 4.3	4 4.3	4 4.3	6 6.4	94 100.0
D	6 7.6	5 6.3	10 12.7	10 12.7	6 7.6	10 12.7	6 7.6	10 12.7	2 2.5	4 5.1	4 5.1	2 2.5	4 5.1	79 100.0
GK	6 6.1	19 19.2	6 6.1	2 2.0	8 8.1	8 8.1	6 6.1	14 14.1	4 4.0	12 12.1	6 6.1	4 4.0	4 4.0	99 100.0
K	7 6.7	8 7.7	6 5.8	3 2.9	9 8.6	13 12.5	6 5.8	32 30.8	6 5.8	—	6 5.8	6 5.8	2 1.9	104 100.0
M	4 4.8	6 7.2	6 7.2	2 2.4	8 9.6	10 12.0	4 4.8	18 21.7	9 10.8	6 7.2	6 7.2	2 2.4	2 2.4	83 100.0
GB	14 12.3	—	15 13.3	12 10.6	6 5.3	2 1.8	13 11.5	25 22.1	2 1.8	—	24 21.2	—	—	113 100.0
計	63 6.5	78 8.1	84 8.7	51 5.3	68 7.0	103 10.7	66 6.8	217 22.4	67 6.9	44 4.6	71 7.3	31 3.2	24 2.5	967 100.0

※　目次や分類不可能な頁は省いたため，教科書の総頁と合計は異なる。表3も同様。

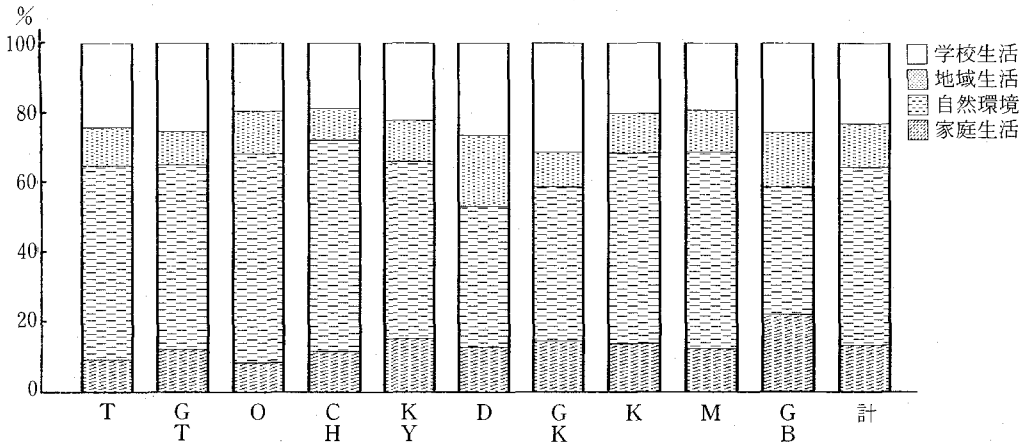

図1　1年生用教科書の4項目比

「通学路・色々な道」「公園の施設・遊び」は各々5.3%，7.0%とあまり多くはない。

教科書別にみてみると，学校生活の項目の量が多いのはGK社で全体の約3分の1に上り，次いでD社の26.6%が続く。地域生活の項目ではD社が最も多く20.3%，次いでGB社の15.9%と全体的に必ずしも多くない。自然環境の項目では，対比が著しい。CH社，O社は60%近くに上るのに対し，D社で40.6%，さらにGB社に到っては37.2%と少なくなる。家庭生活に

関しては，ＧＢ社は21.2％と最も多く，Ｔ社，Ｏ社では10％を切る。学校生活及び家庭生活重視型か，自然環境重視型かでその構成が大きく変わってくるようだ（表２）。

ちなみに，４項目が全体としてよく盛り込まれているバランス型はＴ社，ＧＴ社，ＫＹ社，Ｍ社，Ｋ社，自然環境重視型はＣＨ社，Ｏ社，学校生活重視型はＧＫ社，地域生活重視型はＤ社，家庭生活重視型はＧＢ社と分類できる（図１）。

(2) ２年生の教科書について

次いで，２年生の教科書について検討してみよう。２年生の教科書は多いもので111頁，少ないもので81頁，平均99.5頁である。１年生の教科書とは若干構成が異なり，学校生活が3.4％に大きく減少する代わりに，他の３つの大項目が増える。その結果，地域生活が18.1％，自然環境が59.5％，家庭生活が18.9％となり，１年の教科書同様，自然環境の比重が大きいことになる。小項目別では「おもちゃ遊び」18.5％，「季節と生活」17.4％，「植物」14.0％など自然に関する項目が多く，次いで地域生活に関連して「町探検」の10.6％や家庭生活についての「自分の成長・暮らし」が10.1％と続く。

教科書別には，学校生活はＴ社，Ｄ社が多く，それぞれ9.3％，7.9％を占める。地域生活については，ＧＫ社，ＧＴ社がそれぞれ25.4％，24.6％と４分の１を占めるのに対し，Ｋ社，Ｍ社，ＧＢ社は約13％と半減する。違いが大きい。自然環境はどの教科書も半分以上の割合を占めるが，ＣＨ社で69.1％と最も多く，ＧＫ社は52.6％と最も低い。家庭生活の項目では，ＫＹ社，Ｋ社，Ｍ社が２割を越えるのに対し，Ｔ社は11.1％と半分近い比率へと減る。１年と２年の教科書のトータルでみる必要もあるが，２年生に限ってみていくと，地域生活を重視したも

表３　２年生用教科書の構成

	学校生活	地域生活		自然環境				家庭生活			計
	学校行事	町探検買い物	乗り物	植物	動物	季節と生活	おもちゃ遊び	手紙電話	成長	くらし	
Ｔ	10 9.3	14 13.0	6 5.6	13 12.0	15 13.9	19 17.6	19 17.6	4 3.7	8 7.4	—	108 100.0
ＧＴ	1 1.2	10 12.3	10 12.3	10 12.3	6 7.4	8 9.9	22 27.2	6 7.4	8 9.9	—	81 100.0
Ｏ	1 1.0	14 13.9	8 7.9	20 19.8	12 11.9	12 11.9	16 15.9	6 5.9	12 11.9	—	101 100.0
ＣＨ	—	6 5.5	10 9.1	16 14.5	8 7.3	28 25.5	24 21.8	10 9.1	8 7.3	—	110 100.0
ＫＹ	1 1.0	13 12.5	11 10.6	10 9.6	9 8.7	12 11.5	24 23.2	12 11.5	12 11.5	—	104 100.0
Ｄ	7 7.9	10 11.2	2 2.2	4 4.4	8 9.0	16 18.0	28 31.5	8 9.0	6 6.7	—	89 100.0
ＧＫ	3 2.7	16 14.5	12 10.9	8 7.2	6 5.5	26 23.6	18 16.3	13 11.8	8 7.3	—	110 100.0
Ｋ	5 5.4	6 6.5	6 6.5	4 4.3	10 10.7	25 26.9	11 11.8	14 15.1	12 12.9	—	93 100.0
Ｍ	—	10 11.4	2 2.3	4 4.5	8 9.1	26 29.5	18 20.5	10 11.4	10 11.4	—	88 100.0
ＧＢ	6 5.4	6 5.4	8 7.2	50 45.0	14 12.6	1 0.9	4 3.6	6 5.4	8 7.2	8 7.2	111 100.0
計	34 3.4	105 10.6	75 7.5	139 14.0	96 9.6	173 17.4	184 18.5	89 8.9	92 9.2	8 0.8	995 100.0

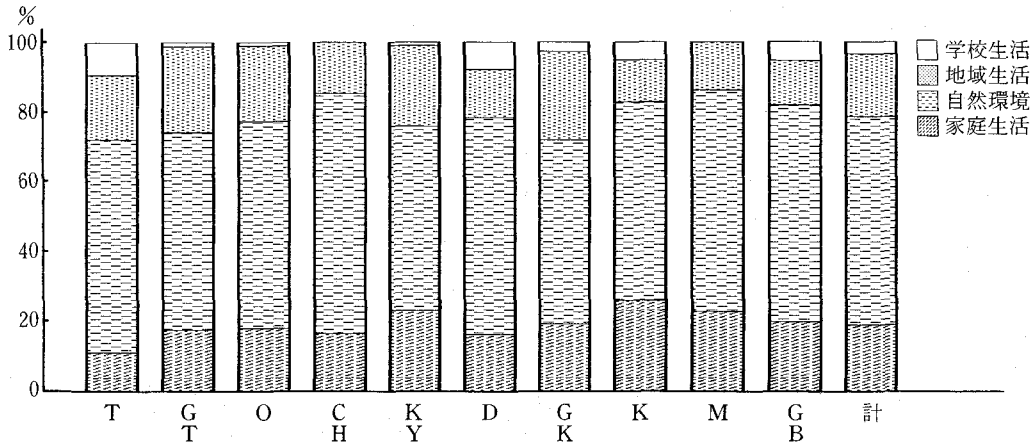

図2　2年生用教科書の4項目比

のと自然環境を重視したものに区別できそうだ（表3）。

これらを1年生の教科書と同様に大まかにタイプ分けすると，バランス型はGT社，O社，GK社，自然環境重視型はT社，CH社，D社，M社，GB社，地域生活重視型はKY社，家庭生活重視型はK社，と分類できそうだ（図2）。

5．住環境関連項目の検討

生活科における住環境に関連した教材を検討するために，限定的に地域空間に関連するものを見ていくと，各学年の小項目において1年生の「通学路」及び「公園の施設」，2年生の「町探検」が該当する。これらのテーマは，先の指導要領下における理科，社会科でも幾つかの角度から取り上げられており，これまでの蓄積を生かすことのできる項目でもある。以下，3つについて教科書の内容を見ながら比較検討していく。

(1) 通 学 路

通学路に関する10社の中味をみると，GB社以外の9社は殆ど同じ内容である。学校の周りを歩きながら，道路標識や安全施設などを見たり，危険な場所には気を付けようと促すというのが全般的な内容である。

学校の周りを歩いた後での活動・作業例示があるのは，T社・O社・D社・M社の4社であり，見つけたものを書き込んだり，発表したりする例示があり，信号機や道路標識がその対象となっている。そのうち，O社は学校の周りの道路地図に各種の標識を，D社は子ども達の好きな道（例えば公園までの道，友達の家までの道）を描かす作業があり，これらにより「道」に関する空間的な理解が深まることも予想される。

GB社は，他社とは内容が異なり，学校の裏山からみた町の鳥観図により，道の様子，自然（海や山）の様子，人が作ったもの，動くもの，動かないものを色分けして表し，町全体の「もの」に視点を当て，空間的な理解を試みようとしているのが特徴的である。

(2) 公　　園

公園の項目では，主として公園での遊びと自然観察が中心だが，数社のものについては，それと同時に公共施設としての意味を付加しているものがある。

O社では，公園での遊びや自然観察のほかに，みんなで使うもの，公園の世話をする人，公園を訪れる人々などをあげる中で，公園のもつ公共的役割に触れたり，K社のように公園を掃除する人を登場させているものもある。またGB社は，公園での遊びに加え，公園にいる人々や遊具，公園で行われる祭等を取り上げ，子どもにとっての公園の意味のほかに地域における様々な側面も伝えようとしている。

(3) 町　探　検

町探検は，町の空間的理解を深めるとともに，生活を取り巻く様々な施設或いは自然的要素を発見し，理解させようとしている。これらは多面的な扱いができるため，内容は出版社により色々な工夫がなされている。町の空間的理解については，どの教科書も地図つくりを基本とし，そのために町の中を探検することを課している。T社では公園や遊び場の発見，店の紹介があり，O社，GK社は，白地図に近所の店や建物を模型で作ったり，絵を描いたりしながら地理的理解を深め，さらに買い物ごっこを通して消費活動の再確認もできるような内容となっている。GB社は，町探検に関する項目はないが，1年生の教科書での通学路に加え，町の人工物，自然的要素などに分けたイメージ地図を載せたり，食べ物を作ったり売ったりして働く人々の様子を描き，若干補っているようだ。

表4　町探検のタイトルと構成

	T	GT	O	CH	KY	D	GK	K	M	GB
タイトル	すてきな町をさがしたいな	町のたんけんをしよう	わたしたちのすんでいるところ	おかあさんのかいもの	おもしろいよ，まちたんけん	町のたんけん	わたしの町のお店やさん	春のまちをたんけんしよう	はるのまち	特に明記なし
Ⅰ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ⅱ	○		○	○	○		○			
Ⅲ	○	○	○	○				○	○	
Ⅳ	○		○	○	○	○	○			

それらをまとめると，Ⅰ：町全体の地理的空間的認識，Ⅱ：町の中の店・買い物，Ⅲ：町の中の自然，Ⅳ：町で働く人々（商店や配達の人々），の4つの内容に分けられ，その結果，10社のものは表4のような組み合わせとなる。町の地理的空間的認識を基本にしつつ，買い物や自然環境の学習を取り混ぜたO社，T社，CH社，買い物を大きく扱ったKY社，GK社，自然環境中心のGT社，K社，M社，それに特に町探検を設けないGB社の4グループに分類できる。商店街での買い物をどのように組み込んでいるかで大きく分けられそうだ。また，働く人々は商店員や配達人が主な対象であり，日々の暮らしを支える人々の役割をときほぐすまでには到っていない。子ども達の生活を中心にした空間的理解にとどまっていると言える。

6．お わ り に

生活科が環境を素材として扱うと同時に，対象としていることは大きくは間違いなさそうだ。同時に，そうした姿勢に関し，環境教育サイドからの期待も大きい。しかし，学校教育における明解な環境教育に関する定義もなく，また全教科の中で横割り的に環境教育を行うというのも，それぞれの教科において必ずしも十分に吟味されて「環境教育」的内容が盛り込まれているわけでもないから，今のままでは現場の不安も大きい。

さて，環境教育の先進国であるイギリスでは，1989年にナショナル・カリキュラムが施行され，その中で環境教育が正式に位置づけられたわけだが，これに関し石原[4]が以下のように詳しくレポートしている。すなわち「環境教育は，ナショナル・カリキュラムにおいて，クロスーカリキュラム・テーマという位置づけに置かれた。」「このような位置づけに置かれた科目は，環境教育（EnvironmentalEducation），経済・産業理解（Economic and Industrial Understanding），健康教育（Health Education），キャリア教育とガイダンス（Careers Education），市民性の教育（Education for Ditizenship）」であり，「環境教育は政治的プロセスを扱い，社会的責任を引き受けることを子どもに奨励することから，特に『市民性の教育』と関連しており，また環境問題についての意志決定が必要なことから『経済・産業理解』との関連も特に重要」だとしている。また，低学年（5－7才）の環境教育のねらいとして「環境を保護し改善するために必要な知識，価値，態度，貢献，技能を獲得する機会を与えること。物理的，地理的，生物的，審美的といった多様な視点から調査したり検討したり解釈することを，子どもたちに促すこと」が上げられている。

これらはわが国の環境教育の方向付けとともに，生活科における「環境」の扱い方，また「住」をテーマにした学習の開発－特に町探検に関連して－に際しても参考になる考え方である。当分は概念の整理と様々な試みが要求される。

〔注〕

1）文部省：大蔵省印刷局　1992

2）曲田清維：戦後中学校教科書にみられる「住教育」の研究，住宅・土地問題研究論文集9　pp 175～205　1986，学校教育における都市教育の歴史的研究，日本都市計画学会都市計画論文集24　pp 517～522　1989，など

3）ベオグラード憲章（1975年）では，環境教育の目的・方針として，①関心をもつこと②知識③態度④技術⑤評価のできる能力⑥参加，の6つを上げている。

4）石原　淳：イギリスの環境教育－『カリキュラム・ガイダンス・7：環境教育』の分析－，環境教育　第2巻第2号　pp 34～42　1993